

開会の挨拶

滋賀県知事 嘉田由紀子

みなさん、こんにちは。天皇誕生日の祝日に、このようにたくさんの皆さまにお集まりいただきまして、ありがとうございます。

天皇陛下におかれましては77歳の喜寿ということで、実はこの琵琶湖のほとりを見ながら、ちょうど3年前だったでしょうか、海づくり大会で、こちらに天皇皇后両陛下がお越しになりまして、鮎やホンモロコの放流をしていただきました。三泊四日ご案内をさせていただいたのですが、その時に「嘉田知事、滋賀はいいですね。山から湖までこうして一体として水が見える。だからこそ、皆が琵琶湖を大切に思えるんですね。」というお言葉をいただきまして、「なるほど。そういう地勢の中に私たちはいるんだな。」と。それだけに今日のテーマでもあります、水を治める、水害に対して自分たちが備えるという気持ちを一体化することも大事ではないかと改めて思っております。

今年を振り返りますと、10月18日だったでしょうか、鹿児島県の奄美地方で観測史上最大となる記録的な大雨が降っております。奄美大島では時間雨量130mmを超えるような大雨だったと伺っております。実は、滋賀県は過去10年ほど災害の被害額が全国都道府県の中で47位、47都道府県しかございませんので最下位ということです。この被害額が最下位というのは、とってもありがたいことなんですが、逆にそれだけに皆「大雨。滋賀県は平気だよ。台風は鈴鹿で山の向こうに行ってくれるし」というようなことで、安心しきっている面があります。ただ、そういう時こそ最も危ないということに、私たちは身にしみて感じております。そのような中ですから、県の流域治水対策としては、いつでもどこでも災害は起きるんだという覚悟を持って、対応をとっていきたいと思っております。

そのために2つの方策、1つは「川の中の対策」です。ダムや河川改修、河川整備、私はできるだけダムに頼らない治水ということを申し上げてきましたけれども、これはダムを100%否定するものではありません。必要なダムは必要です。ただし、必要なダムはほとんどもう出来ているということを申し上げております。ですから、「川の中の対策」は大変大事な対策です。併せて「川の外の対策」、つまり私たちが住んでいるところです。そのために土地利用や、あるいは自分たちが日常で備えるための意識改革なども必要でございます。

そういう中で、本日は京都大学防災研究所の矢守先生には、「生活防災 - 「ふだん」と「まさか」の接点をつくる - 」というテーマで基調講演をお願いしております。矢守先生は、この災害の分野では極めて個性的というか、特異な存在で社会心理学を修めておられます。社会心理学の基礎的な知識と理論を基に、災害対策を実践的に提案いただくという、日本で、あるいは国際的にも極めて貴重なご研究をされておられますので、本日は大変楽しみにしております。矢守先生、よろしく願いいたします。

それから、昨年8月に、兵庫県の佐用町で避難途中で多くの方が水路に流されて命を失ったという大変甚大な被害が発生し、その苦しみの中から一步一步再生をしておられる

佐用町の庵途町長様に本日はお越しいただきました。遠方からありがとうございます。庵途町長さんからは、まさに体験をした者でないとわからない、しかも首長という責任ある立場からのお話しをお伺いできると思っております。

そして、後半には、住民会議でご活躍いただきました大橋様、また学識者部会でご指導いただきました京都大学防災研究所の多々納先生、そして草津市で建築物の対策に取り組んでおられます岡村副部長様に参加いただきまして、パネルディスカッションを予定しております。今日一日みなさんとともに災害対策、ともすれば忘れてしまいがちなこういう時代、こういう滋賀県からこそ、改めて今一度財産を守るという取組について、半日共に考えさせていただきたいと思っております。

少し長くなりましたが、私の方から始まりに当たっての挨拶とさせていただきます。本日はどうかよろしく願いいたします。